

古代史散策

No. 065

(NO.1 + NO.41 合併号)

伊勢神宮 及び周辺 & 伊勢齋宮跡

パナソニック電工松寿会
古代史散策部

昭和52年12月NO.1作成
昭和61年 5月NO.41作成
平成 5年11月復刻
平成28年 9月三刻

《 コー ス 》

守口市駅 8:00 発— 齋宮歴史博物館— 齋宮跡(車内から)— 倭姫宮・神宮徴古館— 皇大神宮(内宮) 参拝・おはらい町おかげ横丁— 守口市駅着 18:00 頃予定

伊 勢 神 宮 と 周 辺

《 総 説 》

【かみかぜの伊勢国】

伊勢国風土記に『かむやまといわれひこ神倭磐余彦天皇 (¹神武)あめのひわけ天日別命を以て伊勢国を平治させた時、国津神の伊勢津彦は「吾 今夜を以ちて八風を起こして海水を吹き、波浪に乗りて東に入らん……」と国譲りして東に去った』とあり。

【伊勢皇大神宮の始め】

紀：みまきいりひこいほに御真城人日子五十瓊殖天皇 (¹⁰崇神)、とよくわひめ豊鋳比売命に託けまつりて、天照大神を以て倭の笠縫邑に祭る云々。

記：(崇神)天皇、豊鋳比売は伊勢大神の宮を拝み祭り給いき。

紀：¹²垂仁天皇 25 年 2 月、天照大神をとよくわひめ豊稻入姫命より離ちまつりて、倭姫命につけ給う。倭姫命、大神を鎮め坐せむ所を求む…中略…伊勢国に至る。時に天照大神倭姫命にうとこよったえ日く「是の神風の伊勢国は、常世の浪重浪の帰する国、かたくに傍国の可憐し国なり。是の国に居らんとする」

【伊勢^{わたらい}国^{ももふね}度^{かたくに}会^{ももふね}の地^{ももふね}】

度会は『百船の度会』と呼ばれ、又『傍国』の名のある如く、大和の国と東国の境であり、東方に開かれた門戸であった。村境の道祖神（境界の神）の信仰にかかわる思想を見る。

《 各 説 》

【皇大神宮（内宮）】

伊勢市館町

皇大神宮は、内宮又は五十鈴宮ともいわれる。祭神は天照大神で、「日本書紀」によれば、¹⁰崇神天皇6年に天皇が大神と御殿を一つにすることは畏多いとして、神鏡と神剣を皇女とよきいりのひめのみこと豊鍬入姫命に託して大和の笠縫村に祀った。しかし、その後よい鎮座地を決めるため各地を転々としたが定まらず、¹¹垂仁天皇の代になって皇女倭姫命が奉仕し、近江、美濃を経て伊勢に入り、各地を巡ったのち天照大神が「この国に居らまく欲す」と言ったので宇治の地に鎮座することになったと云う。しかし、実際には皇室の先祖がこの地に祀られるようになったのは、7世紀の天武朝以降ではないかとの説も出されている。

皇大神宮のご神体は三種の神器の一つ八咫鏡と云われる。ご神体を安置した正殿は、切妻・平入り、堀立柱、茅葺きという古来からの姿をそのまま残した唯一神明造である。この正殿は外側から板垣、外玉垣、内玉垣、瑞垣みずがきの四重の垣で守られ、一般人は決して足を踏み入れることを許されない聖域である。正殿には、東西に内そぎの千木、棟に10本の鰹木が

並び、簡素の中にも荘厳さを漂わせている。正殿の後方に並ぶ東宝殿・西宝殿は、外宮と同様の神宝類が納められている。

宮域内には、皇大神宮の荒御魂を祀る「荒祭宮」風雨を司るしなつひこのみこと級長津彦命なとべのみこと級長戸辺命を祀る「風日祈宮」が別宮として鎮座している。宇治橋の東方には国の重要文化財の太刀3本と神宮神宝類・神宮法楽和歌16巻（ともに国重文）などが所蔵されている。

宇治橋は、五十鈴川（別名御裳濯川）みもすそに架かる橋で、幅約8.2m・全長108mのやや反りのある橋で、両端にある高さ7mの鳥居は、外側（西）は外宮正殿の棟持柱の古材から、内側（東）は内宮正殿の棟持柱の古材から、式年遷宮に合わせて20年ごとに建て替えられる。

【豊受大神宮（外宮）】

伊勢市豊川町

豊受大神宮は、豊受宮、度会宮、外宮などと称されてきたが、地元伊勢では「外宮さん」と呼ばれて親しまれている。火除橋を渡ると表参道で、第一鳥居を通過し齋館、神楽殿を右に進むと正殿に至る。正殿は、内宮と同様唯一神明造で、内宮正殿と構造・様式は変わらないが、棟にいただく鰹木が9本であることと、東西の千木が外そぎであることが違っている。また東西の宝殿も正殿の前に位置していて、後ろに位置している内宮と違っている。正殿・宝殿を守る垣は内宮と同じく四重で、静寂の中に鎮座している。

正殿の祭神である豊受大神は、衣食住を司る神で、農業や養蚕をはじめた神である。²¹雄略天皇のとき、天照大神の求めで丹波の真奈井に鎮座していたのが、伊勢の地に選り祀られることになった。と伝えられている。

板垣に囲まれた宮地の隣にある空地は、遷宮の前の古殿地である。神域内には豊受大神の荒御魂を祀る「多賀宮」。山田原の土地と市内を流れる宮川の洪水から堤防を守護する大土のおおつちのみおやのかみ御祖神を祀る「土宮」。風雨を司る級長津彦命・級長戸辺命を祀る「風宮」の三別宮がある。また神苑内には市民に親しまれている勾玉池があるが、その池に抱かれるようにして山田産土神八社の一つである菝社が鎮座している。

【猿田彦神社】

伊勢市宇治浦田町

祭神は猿田彦神と大田命。猿田彦神は伊勢地方を中心に、広く国土を開拓指導された神。大田命はその後裔で、神宮鎮座、五十鈴川上の霊地を求めて巡歴された時、五十鈴川上の霊域を献じて神宮創建に尽力された。

猿田彦神は天孫降臨の時に先導された神で、

記：天孫降臨の際天やちまたの八衢てらにいて「上は高天原を光し、下は葦原の中国なかづくにを光す神」として登場、天宇受売命あめのうずめのみことの問に答えて「国津神 名は猿田毘古神」と名乗り、天孫降臨の先導をなす。さらに阿邪訶あざか（三重県一志郡内の地名）にいた時、漁撈ひらに赴き、比良夫貝おがいに手をくを啗くい合わされて溺れた。

紀：天孫降臨の章第一ノ一書に、衢神ちまたとして表現され、

「その鼻の長さ七咫あた、背は七尺あまり」で「口尻て明り耀れり、目は八咫鏡の如くして、てりかがやけること赤酸醬あかがちに似れり」とある。

【天の岩戸】

磯部町恵利原

伊勢市との町境の逢坂峠に近い山中にある石灰洞で、水穴とも呼ばれており、国の名水百選に選ばれている。

洞内は各所に地下水が流れ落ち、異様な雰囲気をつくり出している。古代、天照大神が隠れ棲んだのはこの穴だ、などという伝説がある。

【鸚鵡石】

磯部町恵利原

石灰岩の巨大な（高さ 31m、幅 127m）岩で、付近には大小数百の奇岩と松があって趣が深い。

語り場と聞き揚があって、語り場で話すとその声が約 50m 上の鸚鵡石にこだまして、聞き場にいる人に、まるで大岩の内で話をしているように鮮明に響く。

【伊雑宮】

磯部町上之郷

伊勢神宮の別宮で、祭神は天照坐皇あまてらしますすめらのおおみかみみたま大御神御魂である。倭姫命が志摩巡行の際、伊佐波登美命いさわとみのみことに命じて創建させたといわれる。正殿は神明造で、遷宮も皇大神宮の翌年に行い、渡会郡大宮町の滝原宮とともに伊勢神宮に最も関係深い神社である。毎年 6 月 24 日に行われるお田植神事「磯部の御神田」（国指定無形民俗文化財）は、大阪の住吉大社・千葉の香取神宮のそれとともに日本三大お田植祭の一つとされている。

【佐美長神社】

磯部町川辺

伊雑宮の南。もとは大歳宮といい、斎王倭姫命が志摩巡回のときに、千田の葦原の中で稲穂をくわえた真鶴をみつけ、それを祀ったものと伝えられている。

神社のある川辺集落は、昔から交通の要所であり、鳥羽方面、逢坂越えの宇治山田方面、五ヶ所方面、波切から前志摩方面へと道が四方に通じている。

式年遷宮

一定の年数を限って新宮を造営し、神を遷御することを式年遷宮と云うが、伊勢神宮では20年に一度遷宮が行われる。これは伊勢神宮の社殿が、堀立柱であること、屋根が茅葺きであることから20年も経てば傷みがくるため、遷宮とともに装束と神宝など2500点もの調度品のすべてが新調されることから、それだけの理由で遷宮が行われるのではないことがうかがわれる。

この制度は『太神宮諸雑事記』（流布本）によれば、⁴⁰天武天皇のときに定められ、⁴¹持統天皇の朱鳥4年（690）に第1回目の遷宮が行われたと云う。以来これまでに61回を数え、平成25年10月に行われたのは第62回目に当たる。古くは外宮の遷宮は、内宮より2年遅く行われていたが、現在は同じ年に行われるようになっていく。

遷宮に必要な用材は、御袖山（みそまやま）から伐り出されて伊勢に運ばれ、旧神領民である伊勢市民を中心に、一日神領民も加わってお木曳車で外宮へ、川曳で内宮へ運ばれる。お木曳車行事は、各町揃いの法被を着て盛大に行われる。新社殿が完成すると、遷御の前にお白石持といって、新しい宮地に敷き詰める白石を奉曳車に載せ、市民が両宮に運ぶ行事があるが、この時ほ正殿のそばまで一般市民の参入が許される。遷御が済むと、古い社殿は取り壊され、古殿地と呼ばれて20年後の遷宮を待つことになるのである。

【倭姫宮】

伊勢市楠部町

倭姫宮は、内宮と外宮を結ぶ御幸道路の中ほどの倉田山に鎮座し、倭姫命（生薨年不明）をお祀りしている。緑のあざやかな倉田山の西側には、神宮徴古館・農業館、美術館、神宮文庫等があり、この辺りを「倭姫文化の森」といわれる。

倭姫命は、¹¹垂仁天皇の皇女で、¹⁰崇神天皇の皇女とよすきいりひめのみことの後を継いで「御杖代」として皇大御神に奉仕され、皇大御神を戴いて大和国を発ち、伊賀、近江、美濃等の諸国を経て伊勢の国に入り、神慮によって現在の地に皇大神宮を創建された。『皇太神宮儀式帳』には、皇女豊鍬入姫命、倭姫命の巡行の記録があり、14ヶ所のゆかりの地があげられている。

倭姫命は皇大神宮鎮座ののち、神嘗祭をはじめとする年中の祭りを定め、神田並びに各種ご料品を奉る神領を選定し、禰宜、大物忌以下の奉仕者の職掌を定め、齋戒や祓の法を示し、神宮所属の宮社を定めるなど、神宮の祭祀と経営の基盤を確立された。倭姫命から後、代々の天皇は未婚の皇女を伊勢に遣わして皇大御神に奉仕させられたが、この人を齋王と呼ぶようになった。

このような大きな功績を讃えて、神宮司庁と宇治山田市（現在の伊勢市）が倭姫命をまつお宮の創立を決め、大正12年11月、皇大神宮別宮として鎮座祭が執り行われたところで創立は新しいのである。

じんぐうちょうこかん
【神宮 徴古館】

伊勢市神田久志本町

神宮徴古館は、明治 42 年に日本で最初の私立博物館として創設された伊勢神宮の「歴史と文化の総合博物館」です。

神宮を詳しく紹介するために、おまつりや歴史・文化に関する資料を中心に展示している。特に社殿の復原展示や 20 年に一度行われる式年遷宮で新調する御神宝類（撤下品）の展示がある。その他には国の重要文化財 11 点、歴史・考古・美術工芸品など約 13000 点を収蔵している。

徴古館の建物は、赤坂離宮（現在の迎賓館）を手がけた当時の宮廷建築の第一人者・片山東熊かたやまとうくまの設計で、ルネッサンス様式の重厚で格調ある外観が特徴。明治時代の代表的遺構として平成 10 年に国の登録有形文化財となった。

【神宮美術館】

伊勢市神田久志本町

神宮美術館は、遷宮を奉賛して当代最高の美術・工芸家から奉納された作品を展示。絵画は、日展・院展・二科会など諸会派をこえた作品の数々、書は豪壮な筆使いの作品・繊細な仮名文字・緻密な篆刻など作家の個性が表れた様々な作品を鑑賞することができる。工芸は、陶芸・金工・木工・染織・竹工など伝統技術の伝承と芸術性を極めた現代の名匠たちの競演。また、展示廊では四季の風景とともに彫塑の作品がある。

伊 勢 齋 宮

《 総 説 》

いつきの みや いつきの ひめみこ
【齋 宮・齋 王】

齋宮と云えば、職名の齋王を指すのが一般だが、本来の居所いつきのみやの名称であって、職名を云う場合は『齋王』が正しい。齋王の起源は、記・紀に出る皇大神宮の祭祀伝承である。¹⁰崇神紀の豊鍬入姫命とよすきいり、¹¹垂仁紀の倭姫命の説話であろうと云われている。即ち

崇神天皇 6 年紀：

これより先、天照大神、倭の大国魂の 2 神を天皇の大殿の内に並び祀る。而して、その勢いを限りて共に住み給うに安からず。故、天照大神を以て豊鍬入姫命につけて、倭の笠縫邑に祀る。云々

垂仁天皇 25 年紀 3 月 10 日の条：

天照大神を豊鍬入姫より離しまつりて、倭姫命につけ給う。ここに倭姫命、大神を鎮めを坐させむ所を求めて、宇陀の原に至る。さらに還りて近江国に入りて、東、美濃国を廻りて伊勢国に至る。時に天照大神 倭姫命に教えて曰く

「この神風の伊勢の国は、常世とこよの浪重浪帰なみしげなみよする傍国かたくにのうまし国なり。この国におらんと申うと宣う。故に大神の教えままの随やしろにその祠を伊勢の国に建て給う。因りて齋宮を五十鈴川上に興す。即ち、天照大神のはじめて天より降ります

所またこの条には、倭姫が大和より伊勢に向かう道筋を記しているが『皇大神宮儀式帳』に、更に詳しく述べてあり、
 美和（三輪^{みむろ}）御諸宮（笠縫宮）→宇陀阿貴宮（阿貴神社）
 →左々波宮（市原町栲幡神社）→伊賀穴穂宮→阿閉柘
 植宮→淡海坂田宮→伊勢桑名名代宮→伊須々御宮
 果たして、このコースが正しいかどうかは知る由もないが、
 その道筋は古代地方豪族^{ほんきよ}蟠居の地であり、天皇家と地方豪族
 との関わりを垣間見る思いがする。

日本書紀はさらに、¹²景行天皇 20 年 3 月 3 日の条で五
 百野皇女が。²¹雄略天皇元年 3 月 3 日の条には椎足媛^{わかたらし}が伊
 勢神宮を祀ったとあり、その後³³推古天皇までに 9 人の齋王
 が天皇の身代わりとなり、御杖代^{みつえしろ}として皇大神を祀ったとあ
 るが、その頃の齋宮はおそらく五十鈴川のほとりにあったと
 思われ、齋宮が多気の現在地に設立された時期はよく判らな
 い。齋宮の制度が確立したのは⁴⁰天武天皇時代からと云われ
 ているが、果たしてそうだろうか。次の天皇⁴¹持統女帝の御
 代に齋王が定められた記事はなく、私見の仮説だが、齋宮の
 制が確立したのは次の⁴²文武天皇の大宝元年前後であろうと
 思われる。

<伊勢齋宮…祭主又は齋王>

- ¹¹垂仁…倭姫命^{やまとひめのみこと} ³⁰敏達…菟道皇女^{うどう}
¹²景行…五百野姫皇女^{いほのひめ} ³¹用明…酢香手皇女^{すがて}
²¹雄略…稚足=栲幡皇女^{わかたらし たかはた} ³²崇峻…酢香手皇女

- ²⁶継体…荳角皇女^{ささげ} ³³推古…酢香手皇女
²⁹欽明…磐隈皇女^{いむくま} ⁴⁰天武…大来=大伯皇女^{おおく おおく}

紀：天武天皇 2 年（673）10 月 1 日の条

大来皇女を天照大神に遭はさむとて、泊瀬の齋宮に居ら
 しむ。ここはまず身を潔めて神に近づく所なり。

：同 3 年（674）10 月 1 日の条

大来皇女 泊瀬齋宮より伊勢神宮に向かい給う。

文武天皇以後は、⁹¹後宇陀⁹²伏見⁹³後伏見の 3 代 35 年間
 を除き、天皇の崩御乃至即位の時には必ず齋王の交替が行わ
 れ、以降⁹⁶後醍醐天皇まで 660 年間連綿と続いたのである。

【齋王の選出と伊勢群行】

齋王の遠出は、延喜式では、天皇即位の始めに未婚の内親
 王の内から占いによって卜定され（内親王に適任のない場合
 に限り女王）、平安時代には、卜定された齋王はまず宮中の便
 殿の初齋院（職員約 80 人）で約 1 年間、宮城外の浄域（平安
 初期以来は嵯峨野）の野の宮で、さらに約 1 年以上精進潔齋
 の後、その年の 9 月に野宮より葛野川^{かどの}に出て禊し、松尾社に
 奉幣の後、八省院に参内して天皇に別れを告げる。この時天
 皇は齋王の額に黄楊木の小櫛をさし加える。かくして伊勢に
 向かう儀式を齋宮群行と云い、行路の処々の川で禊を行い、
 又近江の逢坂や頓宮などで秦楽した。奉送使は普通中納言か
 参議 1 名弁^{べん}・吏^り・中務丞^{なかつかきのじょう}各 1 名だが、路次の警備の為
 検非違使や看督^{けびいし}がつけられた。群行の路次は、奈良時代には
 「大和→伊賀→伊勢」の官道を、平安遷都後は、始め「山

城一>近江一>伊賀一>伊勢 仁和 2 年 (888) の繁子内親王の群行以後は「山城一>近江一>伊勢」のコースをとるのが一般となった。

【齋宮寮】

齋王が伊勢在任中におかれた^{りょうげ}令外の官。『いつきのみやのつかさ』と云う。^{かんが}官衙は多気郡の櫛田川下流の南岸域におかれ、創設の時期や位置は不明だが、景行記に出る^{やまとたける}倭建尊の記事によりみれば、その設置はかなり古いであろうと思われる。

記：¹²景行記 倭建（日本武）尊の条

故、(天皇の) 命を承りて (倭建尊が) まかり出でます時に、伊勢の大神宮に参りて『神の朝庭』を拝み給いき…云々とあり、この『神の朝庭』が『齋宮』のことかと思われる。

しかし、官衙の規模が整備されその権限が拡大したのは

900 年代初頭が文献上の初見である。

続紀：⁴²文武天皇 大宝元年 8 月 4 日の条

又、齋宮の司は寮に准ず。属官は長上に准ず。

続紀：⁴³元正天皇 養老 2 年 8 月の条

齋宮寮の公文、はじめて印を用ふ。

とある。その造営は群行前に京より造営使が派遣されて行い、殿舎の維持管理は寮官、官舎の修理は大神宮司がそれぞれ担当することになっていたが、平安後期以後は殆ど大神宮の成功で修造し、鎌倉後期にはそれも困難になり、ついに廃絶した。

齋宮寮の職制は、主神司の下に文官 10、武官 2 の 12 司があり、延喜式による職員数は、合計 747 人と規定されている。

その家族や雑役を含めれば相当の人数になり、齋宮の敷地面積が数万坪でも驚くには当たらない。

齋宮の建物は、内院、中院、外院の 3 区に分かれていた。

内院…齋王の御殿、神殿等 (檜皮葺・掘立柱式)

中院…寮務を司る寮庁、寮司の宿舎 (同上)

外院…主神司、12 司等の官舎、倉等 (萱葺・堅穴式)

周囲は溝と垣を回し、松と柳が植えてあったとある。

【離宮院】

齋宮と神宮は 15km も離れているため、早くから途中で『離宮院』がおかれ、天長元年 (824) 以降その度会離宮が常齋宮とされ寮の機能を果たしたが、承和 6 年 (839) にその官衙 100 棟が焼失したので、寮は再び元の多気の宮地に戻った。

【齋宮忌言 16 言】

齋宮では、不吉な言葉 特に仏教用語を話すことは固く禁じられていた。延喜式にその忌言葉 16 が掲げられていて有名である。

『内 (仏教語) 七言』

仏…中子 ^{なかご}	経…染紙 ^{そめかみ}	塔…阿良良枝 ^{あたららぎ}
僧…髪長 ^{かみなが}	尼…女髪長	齋…片膳 ^{かたしき}
寺…瓦葺		

『外 (仏教以外) 七言』

死…奈保留 ^{ななる}	病…夜須美 ^{やすみ}	泣く…塩垂 ^{しおたれ}
血…阿世 ^{あせい}	打…撫ず	突…菌 ^{しし くさひら}

墓…穰
『別忌詞二言』

堂…番燃
優婆塞…角筈

【齋宮跡】 国指定史跡

三重県多気郡明和町大字齋宮・竹川所在

伊勢の主要河川櫛田川の支流、祓川東岸に広がる標高14mの低段丘の西麓に位置し、範囲東西2km南北0.7km大半は畑地だが、南側は伊勢街道と近鉄山田線が東西に走り、人家密集地帯も含まれる。この遺跡は、天照大神の御杖代として、伊勢神宮の三節祭（6、12月の月並祭と9月の新嘗祭）に奉仕する歴朝替任制の齋王の御殿と、齋王の家政機関である齋宮寮の官衙とを包含した宮殿と官衙跡で、飛鳥時代から南北朝時代迄の凡そ600年間存続していた。

延喜式によれば、周囲は溝と大垣を巡らして松と柳を植え、内・中・外の3院から構成された建物は、檜皮葺・掘立柱式と萱葺・竪穴式だったことは先に記した。しかし瓦葺・礎石柱式建物跡は1棟も見つかっていない。建物の規模は平安初期のものが最大で、桁行5間・梁行2間を基本とし、庇付きの建物もある。小形のものは桁行3間・梁行2間を基本とし、末期のものは柱穴も小さい。このほか、2～4間四方の倉庫や四脚門・築地遺構も検出されている。

これらの造営は、9世紀中頃までは国の財政によったが、9世紀末頃からは、大神宮司を独占していた大中臣一族の成功栄爵によった。

出土品には、齋宮での様々な儀式や行事などに使用した土器を一括廃棄したらしい、大量の土師器の杯や皿が詰まった土壙や素堀りの大小の井戸が各所で検出されている。齋宮跡を示す出土物には、当時の都で盛んに使われた、大量の緑釉陶器片や三彩投機片をはじめ、八花双鏡片、石帯、愛知県猿投古窯産の灰釉陶器も多く、須恵器や瓦器質の風字硯、蹄脚硯、円面硯の他「寮」「泉」と墨書した土師器の小皿も出土している。

昭和54年この齋宮跡は、わが国の歴史・文化を解明する上の重要な文化遺産として国史跡に指定され、「財団法人齋宮跡保存協会」がその管理に当たっている。

《 各 説 》

【式内 竹神社】

明和町齋宮中町

古代の地名は、その地の豪族の名を冠したものが多い。この他の「多気」も例外ではなく、曾て竹氏が蟠居していたことは確かであろう。

社伝によれば、「竹の連」の祖「宇之日子」の子「吉日子」がこの地にあったとあり、『皇大神宮儀式帳』にも「竹之首吉比古」の名が見える。当社の始めの祭神は、竹氏一族がその祖神を祀ったものであろう。現祭神は長白羽神他12柱だが、いずれも後年他社より遷したものである。竹神社も同町大字竹川にあったが、明治40年複雑に合祀し、同44年現在地に移ったものである。

奈良時代始めの和銅6年(713)に「風土記の詔」が発令され、地名によき2字をつける事になった時点で「竹一>多岐」とされたのであろう。平安中期に編纂された「和名抄」の「多気」の訓は、「多計、多介」とあって、現在の「タキ」の発音は正しくない。

【齋宮の森】

明和町齋宮

近鉄齋宮駅の北々東約0.4km。こんもりとした森は、古くより「齋宮の森」と呼ばれ、齋宮の御殿のあった所として知られていた。近年宅地開発の波はこの地にも押し寄せ、中世の遺構かと云われていた竹川地区古里の発掘調査の結果、奈良時代の掘立柱や大溝跡と共に、緑釉陶器片やごく珍しい蹄脚硯、大型飾り土馬などが出土、齋宮跡にふさわしい遺構としてにわかに注目された。その後の発掘調査に於いても、建物群は何度も建て替えられた証拠に幾重にも重層して検出され、祭王の交替の都度新規に場所を変えて齋宮寮が建て替えられたと考えられる。藤原京以前の天皇の宮居の即位毎の遷都や、大神宮の式年遷宮の例に徴しても、けだし当然の事と考えられないだろうか。

現在この辺り一帯は、史跡公園として整備され、その整備・保存が図られている。

【齋宮歴史博物館】

明和町竹川

齋宮歴史博物館は、遺跡「齋宮」の解明に、文献資料と考古学の両面から取り組み、齋宮を介して歴史の面白さ、文化財の大切さを伝えることを目的に平成元年に開館した。

館内には、発掘された土器類など出土品の展示室、齋王が

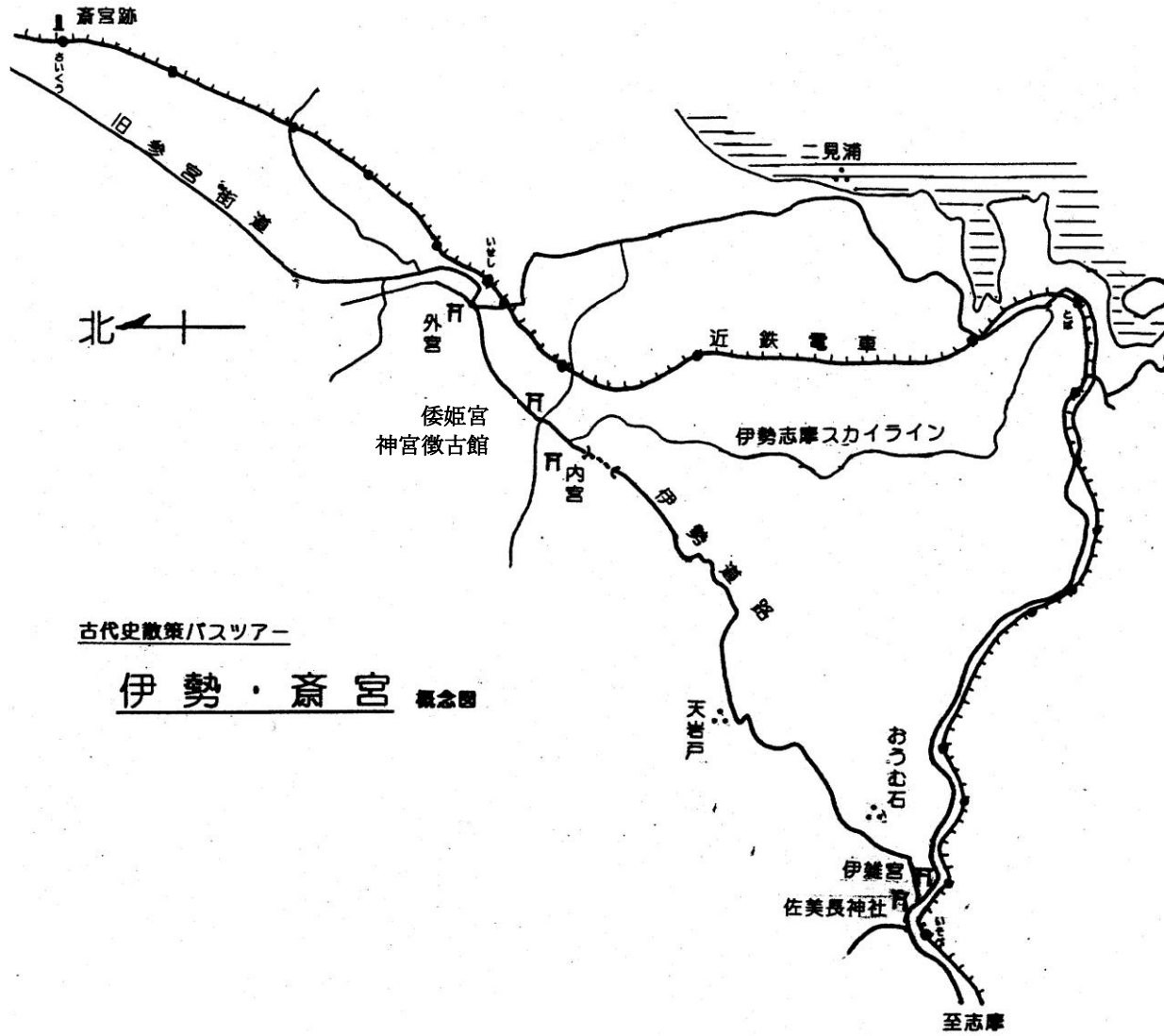
選ばれて伊勢に赴き都に帰るまでの流れを文献史料から再現している展示室、ハイビジョン映像上映装置で齋宮の歴史を紹介する映像展示室などがある。

【齋王 隆子女王の墓】

明和町馬之上算所

⁴⁰天武天皇2年(674)に齋王となられた大来皇女から数えて、最後となられたのは、⁹⁶後醍醐天皇の元弘3年(1333)の祥子内親王(66代、但し⁴³元明朝の2名は不確実)の内、35代目が隆子女王である。女王は⁶⁰醍醐天皇の皇子章明親王の娘で、⁶⁴円融天皇の天禄2年(971)に卜定、在任わずか3年の天延2年(974)病のために逝去。この地に葬られた。

作成 西村 誠 復刻・作成 末岐敏一
パソコン版で復刻・追記 宮下章宏



古代史散策バスツアー

伊勢・斎宮 概念図